

優秀賞

## 大志を持つ。

青山学院高等部 2年 座間 耀永

父は手元をじつと見つめ、それからゆっくりとメモを書いた。「もつと生きたかった。」虚ろな目だった。私と母は頭を突き合わせ、むせび泣いた。気管切開後、喋ることが難しかった父。宣告当初、根治を「ねがって」十二時間に及ぶ大手術。二か月入院。呑み込みを回復するための壮絶なりハビリ。むせながら流動食が摂取できるようになった。「液体状でも味わえる。」と、家族で食卓を囲んだ。大切な時間だった。だが、再発。手術後、嚥下障害。微かに出していた声も失った。再び入院。その後、転移性胃がんから出血。緊急手術。当初、「人生百年時代ですから頑張りましょう。」と言っていた主治医が、放った言葉は、「奇跡は起きません。」怒りを覚えた。緩和ケアへ移った。緩和ケアとは、もう治療をしないという意味だ。手術も輸血も対象外。「これだけ医療が進んでいるのに。」納得ができなかった。父は最期の『ねがい』を書いた。「家で逝かせて欲しい。」

在宅介護は壮絶だった。心臓に近い静脈に針を通し栄養を入れる点滴。交換を誤ると死ぬ。尿道カテーテルの処理。酸素と血圧の管理。痰を引く度、むせる父。褥瘡と下の対応。訪問看護の医師が入院を勧めた。だが、父の「ねがい」を曲げられないと母は踏ん張った。

まだ意識があった正月。父は私宛のお年玉袋に「大志を持つ。」と書いた。無言。だが、目が私を押しした。私は掻き立てられるように社会貢献をする会社設立を決意。父の愛艇名を社名にした。未成年の起業には両親の署名が必要だった。父の意識は既に無かった。代筆を勧められた。意地で待った。薬の交換の合間の奇跡。父は起き、何とか署名。司法書士が「病人とは思えない力強い字。」と呟いた。父がやりたかったことを定款に入れた。そして、朝、父は静かに永遠の航海へ出航した。私は未だそれを受け入れられない。祭壇の父の遺影。穏やかに笑っている。この会社は、父と共にある。私の航海は、ここから始まる。